

カジノの誕生と発展

元帝京大学観光経営学科教授

石井 昭夫

はじめに：遊びと賭け

フランスの社会学者ロジェ・カイヨワ（1913～78）は、著書「遊びと人間」の中で、古今東西の多様無数の人間の遊びを、四種の基本類型に分類した。①アゴン Agon（競争）、②アレア Alea（偶然・運）、③ミミクリ Mimicry（模擬・物真似）、④イリンクス Ilinx（眩暈）の四つである。「アゴン」は古代ギリシャ語の競争を意味する言葉で、スポーツやチェスやカード遊びなど、個人ないし集団がそれぞれの能力を駆使して勝敗を競うあらゆる遊びを包含する。「アレア」はラテン語でサイコロを意味し、アゴンとは対照的に、人間の能力を超えた運と偶然に勝敗を委ねるもので、相手との関係では、勝者は敗者より運に恵まれていたに過ぎない。サイコロ遊びはもちろん、サイコロやジャンケンを使う遊びからパチンコやビンゴまで、偶然が支配する遊びを総称してアレアという言葉を使った。「ミミクリ」は仮装、物まね、～ごっこ遊びなど虚構の世界を一時的に受け入れて遊ぶことであり、「イリンクス」は明瞭であるはずの意識を、滑走や回転その他によって意図的に喪失させて快感や眩暈感を得る遊びを総称する。ジェットコースターもお化け屋敷もこの類型に入る。

カイヨワは、四つのうち三つは動物も遊びとして行うが、偶然を受け入れて遊ぶことができるのは人類だけであるという。そして、偶然を対象とする遊びが「賭け」にほかならない。

競争と偶然と賭け 「競争」が個人の能力を高めて勝負するのに対し、「偶然」は意志を放棄して勝負を運に任せる遊びである。両者は対立する概念であるが、ブリッジやポーカー等のトランプ遊びやマージャンなどは技術と偶然を組み合わせた遊びである。未来は常に不確かであって、勝負ごとであれ、雨が降る・降らないの結果であれ、これを事前に占う（予見する）のは人間の本能である。その占いのどれが現実となるかをめぐって何かを賭ける者が出てくることで、単なる遊びが賭けに変化する。

賭けは原始社会で私有財産の所有が認められた時から始まったとされる。つまり、賭けに提供する財物を持ち、予見困難な出来事のどちらかを当てることに二人以上の人間が財物を賭けることによって始まったというわけである。かくして古代以来、人々は有形無形のモノあるいはコトを賭け、後には金銭を賭けてきたのだが、結果が不確かであるほど賭けは成立しやすい。偶然の関与する割合が大きいほど勝負者の防御力が低下し、当然のことながら負けるリスクが大きくなる。競争と偶然を組み合わせる賭けの場合、ハンディをつけて競争者のチャンスを均等にすれば結果はより不確かになり、それだけ賭けの魅力が増すというわけである。

賭けを組織化してビジネスとして行くと、私的な賭けが賭博ないしギャンブルとなる。遊びと実利を合わせた賭博は人間の本性に深く根付いており、のめり込めば仕事を怠り、財産を

失って家族を路頭に迷わせるなど、社会的な害悪をもたらすことが多い。また、多額の金銭の動くところ犯罪が付き物であり、為政者は社会的害毒を防止するために賭博を禁止ないし制限してきた。今日でも賭博ビジネスはあくまで禁止が原則であって、様々な制限を設けて例外的に容認されているに過ぎない。

カジノの誕生

賭博といっても、ロトリー（富くじ）のたぐい、競馬などのスポーツ賭博、カードやダイスを使った賭けなど様々である。人が集まり遊具を使って賭けごとを行う場所を賭博場というが、「カジノ」と呼ぶ場合、今日では様々な遊具を集めて金銭を賭けることを公認された場所を指す。あるいは公認された賭博場がカジノと呼ばれるようになったといってもよい。

カジノはヨーロッパで誕生し、アメリカ大陸で大きく発展し、近年アジアでもアメリカに勝る展開を見せている。そして今、日本でもカジノ導入の準備が進められている（本誌7月号に新井俊一氏が紹介）ので、この機会にカジノの誕生と発展の歴史を振り返ってみよう。

近代賭博のはじまりはロトリー（富くじ） ロトリーは多数の賞品を提供して不特定多数にくじを販売し、何らかの方法で当たりくじを決め、公表された賞品や金銭を分配するという賭博の一形態である。ロトリーは古代から行われてきた賭けである。新約聖書マタイ伝に、キリストが十字架にかけられたとき、ローマ軍兵士がくじ引きでその衣服を分け合ったと書かれているし（マタイ伝 27-35）、古代ローマ帝国では、酒神バッカスやサトゥルヌ神の祭礼で富くじが行われ、それ以外でも皇帝ネロは、馬や奴隷などを賞品とする富くじを頻繁に行っていた。

中世になると、キリスト教もイスラム教も射幸心^{しゃこうしん}を煽る富くじを反宗教的な行為として禁止したために途絶えたが、ルネサンス期のイタリアで再開されて大きく発展する。1530年代のジェノヴァで5人の市参事会員を選出する際、誰が選ばれるかに関心が集まって賭けをしたのが事の始まりとされている。選挙で使われた投票用紙から思いついて、数字を書いた紙片を販売し、「当たり」と「カラくじ」をつくって賞品を分配する仕組みが考案された。ジェノヴァ、フィレンツェ、ヴェネチアでほぼ同時期に始まったとされている。

ちなみに、イタリアに攻め込んだフランスのフランソワ一世（在位 1517～47）はロトリーが気に入り、早速 1539 年にフランス初のロトリーを販売したという記録が残っている。

コントロールされた賭博へ 単なる私的なグループ内の賭け事が、コントロールされた不特定多数対象の賭博となるにはもう一段階経る必要があり、本式の賭博が始まるのは 17 世紀に入ってからとされる。それまでの賭けは偶然のみに支配され、胴元に利益が上がるシステムが存在しなかったからである。そこで、天文学者のガリレオ・ガリレイ（1564～1642）、数学者のブレーズ・パスカル（1623～62）やピエール・ド・フェルマー（1601～65）といった学者たちが王侯貴族の依頼で確率計算を行ない、カードでもダイスでもコインの裏表でも、ほぼ常時勝てる方法を考案したことからコンセプトが確立されたという。賭博が確率論を誕生させたと言われるゆえんである。そうした研究が出版され、知識が広がると、すぐさま各地の教会が金細工や宝石を賞品とするロトリーを計画して教会の建設費を募りはじめた。他方、商人たちは 1 枚の絨毯を 2～3 百ドゥカート（ヴェネチアの金貨）で売るよりも、1000 人に 1 ドゥカートのリスクを負担させる当たりくじ賞品として提供すれば、利益はるかに大きいことを理解し

た。不特定多数の庶民が安い価格で、偶然の結果に一獲千金を夢見る賭博が始まったのである。

ロトリーからカジノへ 商業的ロトリーに真っ先に熱を挙げたのはヴェネチアの商人たちだったが、その上を行ったのがヴェネチア共和国政府であった。人々のロトリー熱を公的資金調達に活用できると考え、政府自ら市が所有する不動産や市の役職などを賞品とするロトリーを売り出した。それだけでなく、売り上げの一定割合を貧民救済や他国に囚われている市民の救済に充てることを大義名分に、民間の実施するロトリーの規制を始め、最終的にあらゆるロトリーを政府の管理下に置き、私的ロトリーを禁止してしまった。民間のロトリーにはいい加減のものも多く、不正が行われがちだったからでもあった。

しかし、賭け事の禁止はよく言っても効果がなく、むしろロトリーを禁止されたとたんにダイスやカードによる賭博が至る所で行われるようになり、リアルト地区の貴族らはひそかにプライベート・クラブで違法ギャンブルを行う風潮がはびこった。

ヴェネチア共和国政府は賭博の全面禁止は不可能とみて、1638年春のカーニヴァルに際し、元は教会だった「モーゼ宮」の一部を改造して公営ギャンブルを始め、この場所を「イル・リドット」（隠れ家）と呼んだ。これが世界初の公営賭博と言われている。カジノ *casino* という言葉は *casa*（家）の小さなもの、あるいは質素な家といった意味だが、イル・リドットは小さくもみすばらしくもなく、むしろ4階建ての巨大建造物で、大広間が沢山あり、ローソクがふんだんに灯るシャンデリアで明々と照らされていた。ここでプレイするには、フォーマルな服装に三角帽子や仮面をかぶることが条件とされ、賭け金は高額で、上流階級以外がプレイできる場所ではなかった。しかも、見物するだけの客からは入場料を取り、供される飲み物は有料であった。市は大いに稼ぎ、1768年にイル・リドットは拡張の限界がきて、第二のイル・リドットを開業した。そうした場がいつしかカジノと呼ばれるようになったのである。かくして、様々な種類の賭け事をさせる巨大な賭博場＝カジノが誕生し、ヴェネチアになくてはならない公営企業となったのだが、1774年のジョルジョ・ピザーニの市政改革で、不健全な娯楽として廃止され、以後ヴェネチアではカジノが禁止された。

ヨーロッパのカジノ事情

イタリアで盛んになれば、隣国フランスに広がるのは自然の成り行きである。当初王侯貴族は、自分たちは賭け事に熱中しながら庶民にはこれを禁じ、無断で行えば破廉恥罪で厳しく罰せられた。とりわけヴェルサイユのルイ14世（1643～1715）の宮廷ではギャンブルが日常のゲームとして遊ばれていたという。しかし、次のルイ15世（在位1715～74）が全面禁止から制限付き容認へと方針転換したため、パリにいくつかの小賭博場ができた。フランス革命後、革命の指導者たちは旧制度の多くの規制を廃止し、賭博を放任していたが、ナポレオン帝政は賭博規制を復活させ、場所を限定して開業を容認した。フランスにおける公認賭博場「カジノ」の誕生である。この時期に隆盛を誇ったのがパレ・ロワイヤルのカジノであり、最盛時には地下も含めて100室もの部屋で賭博が行なわれていたという。1806年に「温泉場で、シーズン中のみ容認」という趣旨の政令が出されて地方にも広がった。これが金銭賭博と温泉地との関係について公式に言及した最初の文書である。

ピューリタンの伝統の強い英国は、1845年に「ゲーム法」（Gaming Act）によって金銭賭

博を禁止したし、フランスの七月王政（1830～48）も一転して 1838 年の法律によって全面禁止としたから、当時パレ・ロワイヤルにあった 18 カ所のカジノも閉鎖された。折からヨーロッパの富裕階級が冬は南仏の避寒保養地、夏は北の温泉避暑地で過ごす風潮がひろがりつつあった時期であり、ライン川沿いの貧しいドイツ諸侯にとって、フランスのカジノ閉鎖は僥倖であった。パリで賭博事業の経験を積んだ連中が、バーデン＝バーデンなどのドイツの温泉場に転出してカジノを繁栄させたからである。例えば、バーデン＝バーデンに行つて成功したジャック・ベナゼであり、ホンブルクに行ったフランソワ・ブラン(1806～77)であった。ちなみに、フランソワ・ブランは 1842 年にルーレットを今の形に改善し、ホンブルクで活用したというわけである。ブランはヨーロッパ中の富裕階級の金をかき集めて大富豪になった。ドストエフスキーもここで大金を賭けて負け、その経験をもとに「賭博者」を書いたことはよく知られている。

そして、次なる発展がモナコ公国の意図的なカジノ立国政策によるモンテカルロ・カジノの誕生であった。

モナコ公国の試み 18 世紀後半から 19 世紀前半にかけて、北ヨーロッパの王侯貴族の冬の避寒滞在地として南仏地中海沿岸が成長していた。イエール、ニース、カンヌなどである（本誌 2011 年 1～3 月号「避寒地コートダジュールの誕生」を参照）。その中で、国を支える産業としてカジノを発展させたのがモナコ公国であった。モナコ公国はアルプス山脈が垂直に海に落ち込む崖下の国であり、国土は海岸沿いに長さ 3km、幅は広いところで 1km 強、面積わずか 2km²ほどのミニ国家で、資源は何もなかった。1848 年、イタリア統一を目指したサルディニア王国のヴィットリオ・エマニュエル 3 世は、当時モナコ公国の領土だったロクブリュヌとマントンを占領した。両地区を合わせると旧モナコ領の 95% に達する面積だったが、1856 年、混乱の中モナコ公国の王位を継承したシャルル 3 世は、1861 年に両地区の支配権をナポレオン 3 世に売却するという思い切った方法によって独立を維持したのであった。わずか 2km²の独立国など時代錯誤だという国際世論を押し切つての独立維持であった。そのモナコをユニークな観光国家に仕立て上げた功労者がシャルル 3 世であり、その成功の根源がカジノの創立であった。

モナコは 1854 年の時点で、早くもがカジノ設置のアイデアを持っていた。資源のない小国が経済的に自立する唯一の策と考えたからであるが、カジノは当時のヨーロッパで微妙な時期を迎えていた。金銭を賭ける賭博は怠惰と悪徳と反政府の温床になりがちで、これを認めれば収拾がつかなくなることを当局は充分承知する一方で、賭博は人間の射幸心に強くアピールし、結果として多大の収入を生むことも証明済みであった。売春行為と同じで「全面禁止」か「規制して容認」かが問題になっていたのである。カジノの場合はさらにもう一つの可能性、すなわち、過度にならないために、当局自らがカジノの経営に係わって収入を得るという方法であった。

モンテカルロ誕生 シャルル 3 世は皇太子時代の 1854 年、ドイツの温泉地のカジノの実態を、信頼する弁護士エイノーに命じてひそかに調査させていた。バーデン＝バーデンでは、ルーレットは談話室に置かれ、パンフレットは《洗練された楽しみ》を謳うだけで賭け事については語らず、客も表向き賭け事はしない振りをし、カムフラージュして営業していた。これに対し、のちにモンテカルロのカジノを仕切ることになるフランソワ・ブランは、ホンブルクで大っ

ぴらにカジノ賭博を宣伝するという正反対の行き方をしていた。

エイノーはバーデン＝バーデンをモデルにするよう皇太子に進言し、新しくつくる施設にはカジノという言葉を使わず、「海水浴場」Bains de Mer とすることを提案した。1856 年王位についたシャルル 3 世はエイノーの案を採用し、フランス人実業家に委託して経営主体となる海水浴場会社(SBM)を設立させ、1856 年 12 月 14 日、モナコ東端のスペリュグの丘 Plateau de Spelugues（穴倉の意）という名の未開発地に賭博目的のクラブを開設した。冬に人が来る避寒地だったから、夏のうちから各地の避暑地などに案内状を送ったが、シーズンになっても客は来ず、その後も赤字続きで 1862 年に破綻してしまった。ついにエイノーは、翌 1863 年、フランソワ・ブランに建て直しを委託する。この時ブランは 57 歳、ホンブルクでの稼ぎで大富豪になっていた。ブランの計画は、シャルル 3 世とともに、この小国に超一流の「遊び場」を建設することであった。カジノの周辺に豪華なホテルやレストランをはじめ賭博客の楽しみのための様々な施設をつくり、アクセスを整備し、1865 年にはスペリュグという冴えない地名を「モンテカルロ」と改名して宣伝に努めた。モンテカルロとは「カルロの山」を意味し、カルロはフランス語ではシャルルだから、シャルル 3 世の名前にちなんで改名したのであった。ブランによる初代「カジノ・モンテカルロ」は翌 1866 年に完成した。時を合わせるように鉄道が開通し、初年度に 80 万フランの利益を上げた。2 年目にはカジノ入場者数が 345,000 人に達し、3 年目には利益が 300 万フランにものぼった。カジノの成績があまりにも好調なので、シャルル 3 世は以後モナコ公国の諸税を全廃してしまった。

その後のモンテカルロは、ビスマルクのドイツが 1877 年にカジノを禁止したため、ヨーロッパ随一の超高級カジノ・リゾートとして富裕なカジノ客をひきつけていった。

アメリカのカジノ

ヨーロッパで賭博が広がれば、新大陸アメリカに持ち込まれるのは必然である。最初の洗礼はやはりロトリーであった。1612 年、英王ジェームズ一世は北米東海岸初のバージニア植民地（ジェームズ・タウン）の整備資金を集めるロトリーを、ロンドンないし英国内で販売することを許可し、その収益はジェームズ・タウンの整備に活用された。やがて北部でも植民地建設が進むにつれて、英本国での販売ではなく、発展を始めた各植民地で教会や橋、学校や病院などの公共事業の資金集めのためにロトリーが行われた。ただし、本国のロトリーもそうであったが、募集者の横領や分配金の過小、不明朗な会計など、詐欺まがいのロトリーが横行したという。ちなみに初期のアメリカのホテル（迎賓館でもあった）の建設資金集めにもロトリーがいくつも計画されたが、多くは失敗に終わっている。

北アメリカ大陸の植民地にも、闘鶏、ビリヤード、競馬、カード、ダイスなどの通常のギャンブルがヨーロッパから渡来してくる。最初に賭博で名を挙げたのはフランスの植民地であったミシシッピ川河口のニューオーリンズであったが、まもなくピューリタンの東北部諸州にも広がっていった。中でも手軽にできるカード賭博が一貫して主流であった。植民地時代も独立後も、新大陸では農地の開墾、綿花や煙草の栽培、牧畜、牛追い、木材伐採や道路工事、あるいは絶えざる幌馬車での移動や地方への行商などなど、どれをとっても過酷で厳しい労働環境であった。生活の単調さと寂寥^{せまりよう}は容易に賭博に結びつき、至る所で賭博が行われていた。

独立後のアメリカの連邦法に賭博に関する法令はなく、各州に任されていたが、1840 年代にはほとんどの州が少なくとも賭博をビジネスとすることを禁止していた。それでも、富を求

めて入植してきた人々にとって、賭博は数少ない娯楽の一つであり、貧困から這い上がるチャンスでもあったから、非合法賭博が蔓延した。州市の行政官も取り締まる警察も、まだ賭博を抑制する力をもっていなかった。

1848 年のカリフォルニアの金鉱発見は、賭博の世界にも大きな変化をもたらした。まだアメリカ領になる前でほとんど無人に近かった西部がゴールドラッシュに沸き、多くの人々がそれまでの生活を捨てて押し寄せた。カリフォルニアに続いてコロラド（1858 年）、ネヴァダ（1859 年）でも金鉱が発見され、西部は急速に発展するが、西部の荒くれ男たちの主なる娯楽は酒場と酒場でのカード賭博であった。ゴールドラッシュ時代のサンフランシスコでは、「…すべての人が賭博をした。賭博は娯楽であり、あらゆる階層の人たち、すなわち、裁判官、牧師、医者、弁護士、商人、事務員、貿易業者、技師、労働者、鉱夫、農夫、さらにいろんなタイプの冒険者たちが賭博台に押し寄せ、人を掻き分けながら金や銀の賭け金を放り投げるのだった。」（主要参考文献 2、増川「賭博・Ⅲ」より）。ゴールドラッシュが収まり、サンフランシスコやロサンゼルスロサンゼルスの町が成長してくると、良識派住民による賭博反対の運動が始まる。以後長く続くことになる住民と行政による非合法賭博撲滅の戦いの始まりであった。

1860 年代には、東部、中西部、ミシシッピ川流域で都市化が進み、大都市と呼べる町が多数誕生していた。集住した人々の大半は大都市での成功を夢見ていたが、現実は厳しく、手っ取り早く夢をかなえる道は賭博であった。ニューヨークでも賭博は非合法だったが、バーやレストランでは広間に賭博台が置かれ（まだ賭博専用の部屋はなかった）、誰でも賭けることができた。南北戦争（1861～64）が終わると、禁止法を無視して本格的な賭博場まで登場し、州や市の幹部たちも大っぴらに出入りした。政治家も役人も賄賂を受け取り、賭博を放逐する意志も力もなかった。例えば、ヘビー級ボクサーだったオールド・スモークことジョン・モリッセーは、1863 年、サラトガ・スプリングズに競馬場をつくり、併せて宮殿のように豪華な賭博場を建設して成功した。ボーイには揃いのユニフォームを着せ、高価な銀皿や陶磁器の食器に山海の珍味を盛り、^{くるぶし} 踝まで沈むような絨毯を敷き詰めた。アメリカのモンテカルロと呼ばれた彼の賭博場には上流階級が押し寄せ、モリッセーは賭博によって巨万の富を築くことができた。サラトガの賭博場は、彼の死後 1894 年に、名門の出で東部の非合法カジノで同じく賭博富豪になっていたリチャード・キャンフィールドが買収し、さらに豪華な賭博場に仕立て上げ、ギャンブルのプリンスと呼ばれる成功者となった。キャンフィールドは、女性と地元住民の賭博場への入場を禁止し、地元の教会、病院、孤児院などに定期的に巨額の寄付をして賭博場への非難を和らげる努力をしていたが、1904 年に合衆国で賭博禁止の大運動が起こった時には抗しきれず、閉鎖のやむなきに至ったのであった。

以後人目に立つ賭博場は影をひそめるが、非合法賭博が止むことはなく、とくに第一次世界大戦後の禁酒法時代（1919～33）には、非合法組織マフィアのもとで、密造酒と賭博と売春が蔓延していたことは周知の通りである。

ラスベガス誕生 第二次世界大戦中は、さすがに賭博は影をひそめたが、戦争が終わると再び非合法賭博場が至る所で復活した。しかし、組織犯罪と結んだ賭博に対する世間の目は一段と厳しくなり、追われた賭博組織は、最初に賭博を容認したネヴァダ州に向かう。ロサンゼルスやサンフランシスコからもカジノは締め出され、そうした動きの中でカリフォルニアとの州境の砂漠の町ラスベガスに、最初の公認カジノが誕生したのであった。

ラスベガス Las Vegas とは草原の意である。1848 年の金鉱発見以来、カリフォルニアに一

獲千金を夢見る男たちが押し寄せたが、ラスベガスはサンタフェからサンフランシスコに向かって砂漠を横断する途中の休息所となり、水の便が良かったため住み着く人が増えていった。それでも、1905 年のサンタフェ鉄道開通後も静かで小さな町のままであった。1929 年の株式大暴落後の大恐慌期の 1931 年、さしたる産業のなかったネヴァダ州は、1911 年にいったん禁止した賭博を再び合法化することを決めた。同じ 1931 年、連邦政府がラスベガスの南西約 30 マイルの地点にボールダーダム（1947 年にフーバーダムと改称）の建設を始め、政府が派遣するダム建設の技術者や労働者を住まわせるため、付近に人為的にボールダーシティが造られた。連邦政府直轄市であったボールダーシティは、賭博が合法化されたネヴァダ州内であったにもかかわらず、工事に支障が出ることを怖れて賭博を禁止した。そのため、ボールダーシティに住む建設関係者や労働者は週末にはラスベガスにやってきて、酒と賭博で時を過ごすようになり、ラスベガスは賑わいを増していった。しかし、1936 年にダムが完成すると、一時の賑わいは去ってもとの静かな町に戻ってしまった。

この時期、東部の諸都市や中西部のシカゴなどでは、非合法の賭博場が無数にあり、マフィアの管理下に巨額のアングラマネーが動いていた。このマフィア・マネーがネヴァダ州の賭博容認を機に西部への事業展開を図る。カジノを始めるには巨額資金はもちろん、カジノ経営のプロや訓練を受けた従業員、ギャンブラーたちの存在が必要である。西部の賭博事業開拓のためにシンジケートから西部に送り込まれたのがバグジーことベンジャミン・シーゲルであった。太平洋戦争勃発前の 1941 年にロスアンゼルスに乗り込み、ラスベガスへの展開を試みるが、戦争勃発とともにラスベガスに空軍の軍事教練施設が置かれて歓楽街が誕生するのを防ぎ、古くからの土地所有者が踏ん張って東部マフィアの進出を押しとどめることができた。

第二次大戦が終わると、いよいよラスベガスの発展が始まる。シーゲルはラスベガスを高級カジノ都市にすることを目指して豪華絢爛たるフラミンゴ・ホテルを建設し、1946 年のクリスマスにオープン披露を行なった。フラミンゴ・ホテルはこのあと 50 年間にわたってラスベガスのカジノ・ホテルのモデルとなり、今日も健在である。フラミンゴに続いて次々とカジノを売り物とするホテルが建てられ、全米唯一のカジノ都市が誕生していくのだが、シーゲル自身はホテル完成の絶頂期からわずか半年後、ビバリーヒルズの豪邸で仲間割れしたマフィアのボスに射殺された。

ラスベガスの変身 マフィアが牛耳るカジノ都市ラスベガスに転機が訪れるのは、大富豪ハワード・ヒューズのラスベガスへの移住であった。ヒューズは人目を避け、デザート・ホテルの最上階二階分のフロアを借り切って住居としていた。彼は 1946 年の飛行機墜落事故で重傷を負い、痛み止めに使用された麻薬の中毒に陥った。両方の後遺症で人前に出なくなり、マスコミを避けてラスベガスに隠棲したのだったが、1966 年ホテルのオーナーに立ち退きを迫られた時、たまたま TWA 航空の買収に失敗して株を売却した直後だったため、この挑戦を受けてホテルを丸ごと買い取ってしまった。これをきっかけにヒューズはラスベガスのホテルを次々買収し、犯罪組織の資金源とされてきたカジノを合法的で正当な事業として展開した。それまでカジノを相手にしなかった大銀行も、カジノを企業と認めて融資に応じるようになった。かくしてラスベガスのカジノは、怪しげな個人所有や家族企業から大企業によるビジネスへとイメージチェンジし、幹部従業員もギャングからネヴァダ州立大経営学部卒の若手へと変わっていった。1980 年代になると、ねらう客層も少数の大口顧客から大衆へと変わり、のちにラスベガスのディズニーランド化と言われる方向へと進んで行く。横行していたいかさまも絶滅

し、ギャンブラーという言葉に換えて「ゲーミング」が使われるようになった。

アトランティック・シティ ラスベガスと並び称せられるのが大西洋岸ニュージャージー州のアトランティック・シティである。現在のアトランティック・シティはフィラデルフィアから東へ 100km 弱、ニューヨークからは 190km ほど、首都ワシントンとボルチモアからも車で約 3 時間程度というカジノで有名な海浜リゾートである。

もともと、古くからの海浜リゾートではあるが、アトランティック・シティがカジノ都市になったのは比較的最近である。1853 年に海浜沿いに最初のホテルができ、翌年鉄道が開通して町が誕生した。以来東部有数の海浜リゾートとして発展し、1870 年に最初の板敷遊歩道「ボードウォーク」が作られた。海浜に並ぶホテルのロビーが砂だらけになるのを避けるためにシーズン中ホテルの前面に板敷の歩道を置いたのが始まりである。最初のうちオフには取り外していたが、砂の防止に効果的であるうえ歩行者に好評だったので常設とし、道幅も長さも拡張して現在は 6 マイルに及ぶ市の名物になっている。

アトランティック・シティは 20 世紀に入ってから大きく発展する。浜辺に立ち並んでいた質素なボーディングハウスが次々と大型ホテルに建替えられ、とくに 1919～1933 年のいわゆる禁酒法時代は、アトランティック・シティの黄金時代であった。ボードウォークから海に向かって直角に突出す英国風ピア（埠頭）では、グレン・ミラーやベニー・グッドマンらが滞在客を楽しませていた。リゾート地アトランティック・シティは酒の持ち込みに寛容で、レストランやナイトクラブの裏部屋では酒もギャンブルもほとんど自由であった。これがアトランティック・シティの人気を高め、世界の遊興地（World Playground）を自称するほど賑わったのであった。

しかし、第二次世界大戦後は東海岸の他の古くからの海浜リゾート同様、アトランティック・シティも衰退期に入った。戦前には列車でやってきて 2 週間程度滞在していた客が、戦後のマイカーの普及で 2～3 日で他所へ行ってしまうようになった。さらに決定的だったのは、航空機の発展でフロリダやバハマなどに簡単に行けるようになって富裕客を奪われ、リチャード・バトラーの観光地発展段階論（主要参考文献 6 を参照）のいう典型的な衰退期が訪れたのであった。再生への道はあるのか。模索の結果出した答えがカジノ導入であった。1970 年代前半に行われたミシガン大学の調査によると、アメリカ人の大人の 61%が何らかのギャンブルをやっており、その大きな部分は東部居住者であった。にもかかわらず、カジノが合法化されているのはネヴァダ州だけだったから、膨大なギャンブル需要はネヴァダ州か北東部の非合法賭博に吸い取られていた。このままでは、財政難に苦しむ多くの州は指を咥えて見ているしかない。そこでニュージャージー州がカジノ解禁の方向に踏み切り、1974 年に解禁の可否が住民投票にかけられた。結果は、ラスベガスのような組織犯罪流入の恐れ、聖書の教えに反するというピューリタンの反発が強く、否決されてしまった。2 年後の 1976 年、州全体を対象とせずアトランティック・シティに限定し、組織犯罪の潜入には厳しいチェック体制で臨むことを条件に再度住民投票が行われ可決されたのであった。

法案が通過すると、ただちにリゾート・インターナショナル社が結成され、1978 年 5 月 26 日初の公認カジノを開業した。開業 1 カ月の成績はラスベガスのどのカジノをも上回る一日平均入場者 8 万人、一日平均売上げ 75 万ドルを記録した。この実績を見て次々にカジノ経営者が進出し、厳しい規制のもとに新しいカジノ都市が誕生したのであった。

インディアン・カジノ ネイティブ・アメリカンは賭事好きで、彼らの間で古来様々な賭事が

行われていて、賭博は彼らの文化でもあった。20 世紀に入り、ネイティブ・アメリカン部族の生き残りは人里離れた居留地に閉じ込められ、土産物売り、伝統芸能を見せるなどして細々と暮らしていた。それが、1980 年代にネイティブ・アメリカン居留地でのカジノ開設が容認され、アメリカのカジノの大きな勢力として成長してきた。きっかけは、1970 年代にモービル・ホームで暮らしていたネイティブ・アメリカンのカップルが財産税の請求書を受け取ったことから訴訟を起こし、ネイティブ・アメリカンの処遇をめぐって控訴審は地方法廷から連邦最高裁まで行った。結果として、居留地に住むネイティブ・アメリカンに対し州は課税する権限がないことが確定した。

1979 年、フロリダのセミノール族が弁護士の指導のもと、フォート・ローダーデールの居留地で高額の金額を賭けるビンゴ・ホールを建設した。計画では週 6 日開業とされていたが、賭け事は週 2 日以内とする州法に違反していた。居留地の所在する郡のシェリフは、開業と同時にビンゴ・ホールに踏み込んで関係者を逮捕した。セミノール側は、居留地内での行動の自由は連邦法によって守られているとして訴訟を起こし、州法廷はネイティブ・アメリカン側に軍配を挙げた。1980 年にはカリフォルニアのミッション族の一派カバゾン・バンドが貧困から脱するためにビンゴとポーカーのカジノを建設したが、官憲はこれを一方的に閉鎖し、ネイティブ・アメリカンたちを逮捕しただけでなく、残された賭け金や財物等を押収した。このケースはさらに大きな法廷闘争になり、やはりネイティブ・アメリカン側の勝訴に終わったのだが、今回は個別ケースの裁定にとどまらなかった。1986 年に連邦最高裁が最終的にネイティブ・アメリカン居留地内でのギャンブルの可否は州政府の権限下になく、連邦議会のみが決定権を有するとの採決を出して決着した。1988 年に連邦法「ネイティブアメリカン・ゲーミング法」が制定され、居留地内のカジノ合法化が決定した。これにより居留地で次々とカジノが建設され、今日では全米の半数以上の州の居留地でカジノが開かれている。

そのうち最大の成功例がコネチカット州のフォックスウッズ・リゾートで、4 ホテル計 2266 室を擁する大型カジノである。同カジノはスロットマシンの収益の 25% をコネチカット州に支払う契約であり、その額は年間 2 億ドルに上る。もっとも、ネイティブ・アメリカンのカジノといっても、働いている従業員の大部分が白人であると、訪れた黒野十一が「カジノ」(主要参考文献 3) の中で報告している。

アジアのカジノ

賭博自体は万国共通の娯楽であるが、不特定多数を相手とするカジノ事業は、第二次世界大戦以前、アジアで発展する余地はなかった。アジアの独立国は日本と中国とタイだけで、植民地宗主国からきた支配階級や現地人の上層部が小規模の賭博を内輪で行なうことはあっても、カジノ建設には至らなかった。

唯一の例外はポルトガル領だったマカオである。マカオと香港は中国にとってどちらも外国(ポルトガルと英国)であったが、貿易の拠点として繁栄していた香港が競馬以外の賭博を禁止したのに対し、良港の条件を欠いていたマカオでは、1850 年代に宗主国ポルトガルが財政難を補うために賭博を容認し、多数の小賭博場が誕生した。マカオのカジノが近代化する第一歩は 1934 年にタイ・シン興業という企業にカジノ独占権を与えたことであった。同興業は最初のカジノをセントラル・ホテル内に設置し、カジノのなかった香港や広東からの客を集めて賑わった。第二次大戦中ポルトガルは中立を維持し、日本もマカオの中立をある程度尊重していたから、周辺から多くの人々がマカオに避難し、カジノも細々ながら生き続けた。

第二次世界大戦後、1962年にスタンレー・ホーを中心にマカオと香港の企業家が合同で設立したSMDT（観光娯楽企業連合）というシンジケートがカジノ開設権を得ると、マカオのカジノを欧米風に一変させた。1964年に日本人の海外渡航が自由化され、続いて台湾人、韓国人の渡航自由化が続き、70年代以降マカオは極東アジア随一のカジノに成長していく。1999年にマカオは中国に返還され、2001年にSMTDの独占権の期限が切れると、アメリカをはじめとする外国資本が入り、2009年現在、マカオのカジノ・ビジネスはラスベガスをはるかに超える世界最大規模になっている。

お隣の韓国は、1967年、時の朴正熙大統領が外貨獲得のためにカジノを公認した。1967年に最初のカジノが仁川オリンポス・ホテル、翌年にはシェラトン・グランデ・ウォーカーヒル・ホテルがカジノを開業した。最初は必ずしも外国人オンリーではなかったが、仁川オリンポスが闇カジノに係わったことをきっかけに、1969年以来韓国人客のカジノへの出入りは厳禁となった。1970年代以降、急増する日本人海外旅行者を目当てにカジノが増設され、2000年には韓国人も遊べるカジノが初めて江原^{カンウォン}に設置された。

シンガポールの Integrated Resort 長年ロトリーと競馬以外のギャンブルを禁止してきたシンガポールは、2005年にリー・シェンロン首相の強いリーダーシップにより「複合観光施設」Integrated Resort (IR) の名のもとにカジノを導入する方針を閣議決定した。キリスト教とイスラム教のグループや福祉団体が反対を表明し、公聴会では反対意見が多数を占めた。数万人に及ぶ反対署名も集まったが、与党人民行動党の一党独裁に近い状況では無視され、カジノ導入が決定した。野党労働者党のロー・ティアキャン党首は国会演説で「政府はこの件について国民の意見を聴いておきながら、その意見を無視して強行した。その結果が吉と出るか凶と出るか、われわれはただ待つしかない。万一政府の決断が間違っていたら、国民を破滅へ向かう『帰らざる河』に流すことになる」と警告した。

シンガポールのカジノ導入は、周辺諸国との競争激化による観光産業の相対的地位低下を食い止め支援するのが目的で、カジノを主力とする複合観光施設をマリーナ・ベイとセントサ島に建設することを決定した。企画コンペから6年の歳月をかけ、巨額の外国資本の投資によって、2010年、二つの大型複合観光施設「リゾート・ワールド・セントーサ」と「マリーナ・ベイ・サンズ」が相次いで開業した。2013年現在事業は予想を上回る成功を収めており、日本のカジノ導入のお手本とされているようである。

ここ数年、中国人を筆頭にアジア諸国からの海外旅行者が激増しており、フィリピン、マレーシア、ネパール、インドネシア、ベトナムなどでもカジノが容認され、自国内でカジノを楽しめないアジア人旅行者で溢れている。

むすび：本当に大丈夫か

有り余る娯楽の種類と機会に恵まれている今日、カジノもまた娯楽のひとつとして容認される時代になったのかもしれない。また、カジノが巨額の利益を生み得ることは証明済みであるから、先進事例を研究した上で、わが日本もカジノの一部解禁に向かおうとするのも自然の流れであろう。

日本のカジノ導入計画は、長年の積み重ねによって成長してきたカジノより、ゼロから出発したシンガポールを手本としようとしているように見える。しかし、巨額の投資を呼び込んで実現したシンガポールのような「複合観光施設」が成り立つ立地は大都市圏にしかないのでは

ないだろうか。事実、報道によれば、カジノが解禁されれば東京（お台場）や大阪（夢洲）が真っ先に手を挙げそうな雲行きである。

先進国の政治経済中心都市で大規模カジノを開設している例はない。自国民に開かれたカジノは基本的にリゾート地に限定され、居住地を離れた非日常の遊びとして許容されてきた。モンテカルロ、ラスベガス、アトランティック・シティはいずれもリゾート都市である。新興のマカオとシンガポールは都市国家型のリゾートで、カジノの客はほとんどが外国人である。

ギャンブル依存症の問題も克服されたとは言い難い。日常の手近なところにカジノができて本当に大丈夫なのか気がかりである。地域経済の活性化や財政改善という「経済」の要請だけがまかり通ってよいのかどうか。今後カジノ解禁をめぐってどんな議論が展開されるのか、関心をもって見守っていきたい。

主要参考文献

1. 「遊びと人間」ロジェ・カイヨワ（多田道太郎他訳）、講談社学術文庫、1990
2. ものと人間の文化史シリーズ「賭博」（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）増川宏一、法政大学出版会、1982
3. 「カジノ」黒野十一、新潮社、1997
4. 「マカオ物語」浅井信雄、新潮選書、1997
5. 「避寒リゾート『コートダジュール』の誕生」石井昭夫、国際観光情報（本誌）2011 年 1 月～3 月号
6. 「観光地発展段階論の系譜」石井昭夫、立教大学観光学部紀要、2002 年 3 月
7. 「日本における カジノ導入の動きについて」新井俊一、国際観光情報（本誌）2014 年 7 月号